

「系譜一」（松下家文書一・一）

孫右衛門記

一、三州苜屋之御城にて御奉公相勤、御奉公之筋目不相知旨、伊太夫代ニ明屋敷組頭之書付控有之、其外之儀ハ留書も無之、年曆久敷事故、委細不知、右組頭へ出候書付、伊太夫記之所ニ記

孫右衛門生国ハ三州にて可有之敷、伊太夫代迄ハ此孫右衛門為元祖故、本国三州と由緒書等ニ記

三州苜屋之城にて之事ハ此城、家康公御手ニ入被遊候以後苜屋之御城ニ御奉公相勤可申敷、分限高不相知、明屋敷組之事ハ家康公御代より被召仕候、伊賀之忍ひ之者、服部半蔵手ニ被為附、所々御陣場之御用相勤、御治世之節、御先手組同心之内へ刻組ニ被仰付、尤半蔵殿ニも御先手頭被相勤、此伊賀之者之事乱世之時分、御隱密御用相勤候者故、御忠勤格別被思召、御治世之節ニ至、大奥御広敷之御番ハ御内証向にて御大切之場所故、年老之者ニ御番被仰付相勤候処、病死之者跡家督之者或ハ老衰にて御広敷御番難相勤者共之儀、其頃諸大名御旗本ニ不限家屋敷公儀へ上り候分、右之者ニ勤番被仰付候、是を明屋敷御番伊賀者と申候、御広敷伊賀者、明屋敷伊賀者共、御留守居衆ニ惣支配被仰付、御広敷にてハ番之頭衆、明屋敷にてハ組頭差引にて相勤候、伊賀者之由緒ハ十郎右衛門記之所ニ記
右之通故、孫右衛門生死之年月日不相知、菩提所葬所も相知不申候

金左衛門記

一、慶長十九甲寅同廿乙卯年兩度之大坂御陣之節御供仕、御持弓久永源兵衛組にて御奉公相勤、其後井戸新右衛門組ニ罷成候節、辛巳年嚴有院様御誕生ニ付、三州者之筋目、御奉公之年數御僉議被遊、兩御陣共ニ御供仕候ニ付、御広敷御番被仰付相勤、其後栄松院殿元屋敷定番ニ被仰付、無恙相勤候ニ付、

癸巳年倅十郎右衛門被召出之旨、伊太夫代ニ明屋敷組頭え書付出候控有之、右組頭え出候書付伊太夫記之所ニ記

東照大権現宮

台徳院殿

慶長十九同廿兩年大坂御陣之儀は、摂州大坂之城ニ豊臣秀頼公被籠、從関東家康公駿府之御城秀忠公江戸之御城御出陣、於是大坂両御陣と云、此節御供之儀は孫右衛門金左衛門兩人共ニ御供仕候哉、又は孫右衛門ハ死去以後ニて金左衛門計御供仕候哉、此刻金左衛門家督ニて御供仕候哉、年久敷事故不相知

御持弓久永源兵衛組と有之候得共、井戸新右衛門組之節と有之を見れハ御持弓組ニてハ有之間敷、百人組御持組御先手組之頭衆前録を引書ニ見れハ御持筒頭上略久永源兵衛、水野藤右衛門下略、御先手弓頭久永源兵衛、永見新右衛門下略、組屋敷目白、御先手弓頭井戸新右衛門下略、組屋敷本所小石川両所与力六騎、同心三十人、但、慶長以来久永源兵衛組与力同心源兵衛代ニ分ケテ井戸新右衛門組ニ成ル、此組筋延享元子年頃之頭布施孫兵衛、右之趣を以て考ニ金左衛門儀御先手弓組ニて分限高三拾俵式人扶持ニて可有之

御広敷御番之事、最初御広敷と云ハ御本丸ニ際ル、段々御当家御子孫多被為成、御一方ツ、御住居被遊、御人被召仕候故、或西丸、二丸、三丸、又は御女中様方附之御広敷御番被為附、右最初御本丸計之節御番之者ハ元家康公御代より被召仕候伊賀之忍ひ之者、始服部半蔵手ニ被為附、半蔵家断絶ニ付御先手組へ刻組ニ被仰付、但、半蔵事御世治り候てハ御先手頭衆へ伊賀之者刻組被仰付、尤半蔵殿ニも御先手頭被相勤、右家断絶以後、其手之者も御先手組へ刻組ニ入申候、此伊賀之者之内より、御広敷御番被仰付候事ハ御広敷ハ奥方御大切之場所故、伊賀之者之内年老之者御広敷御番被仰付由ニて、

御広敷番之頭附ニテ御留守居支配ニ被仰付相勤、然ルニ家光公御代家綱公寛永十八辛巳年八月三日御本丸ニテ御誕生被遊、女中を被為附御住居御一方増候ニ付、御先手組之内伊賀之者被仰付、此節伊賀之者之内ニは年老之者少く候故、三州者御先手組之内ニ有之、此内よりも年老之者御広敷御番被仰付榮松院殿元屋敷定番相勤候事、十郎右衛門別家被召出候事、十郎右衛門記之所ニ記

一、拝領屋敷鮫ヶ橋谷町、十郎右衛門同町一所ニ拝領、此記十郎右衛門記之所ニ記

一、伊賀者最上甚右衛門ハ由緒有之候哉、金左衛門方より老人扶持ツ、送り申候由、由緒続之記ハ知レ不申候旨、伊賀者矢部庄蔵ハ庄右衛門孫ニテ庄蔵母ハ庄右衛門娘、此庄蔵母之物語被致候

一、金左衛門病死、家督相続之者無之此家断絶

遠藤市郎兵衛物語被申候、金左衛門儀外ニ実子無之候故姪婿組同心ニ有之候を兼て養子致可申積有之、右姪婿誰へ跡式被下置候様願候処、右婿之頭より暇出不申候故、家督相続之者其外ニは無之、断絶致之由ニ候

一、金左衛門寛文十三癸丑年二月十九日死去

戒名明体常円禅定門

一、金左衛門妻延宝六戊午年正月六日死去

戒名悟窓妙頓禅定尼

伊太夫明屋敷組頭へ出候書付親類書之控を以看レハ本多仁右衛門娘之由記

当代新規ニ伊賀者ニ被召出故、根元之伊賀者ニ准ス、根元伊賀者之由緒ハ別帳ニ記

一、高式拾俵式斗六升式合五勺式人半扶持新規被召出金左衛門御広敷御番被仰付相勤、其後榮松院殿元屋鋪定番被仰付無恙相勤候ニ付、為御加増分家綱公御代承応二癸巳年十郎右衛門被召出、伊賀組之御入、御広敷御番被仰付、此節相番中根長右衛門倅市郎右衛門も同高同扶持ニ被召出、当已廿七才遠藤市郎兵衛物語ニ被申候、御比丘尼所榮松院殿元屋鋪是をいてう屋敷と申候由、定番人幾人ニて勤候哉人数ハ不知由、数年相勤候ニ付御加増頂戴仕度旨、御留守居衆迄節々願置候、御承知ニは候へ共未仰付も無之、又々願候へは御留守居衆御申候は、相応之明キ高も候ハ、夫を以成共願可申候由ニ付、折節兩人之明高有之候故、是を以御願被下候様願候へは、此兩人之高ハ二人へ被下候へは、三拾俵ツ、ニハ不足ニ有之候へ共不苦候哉と御申被成候、然共此節願不申候てハ又何時迄致延引候も難計ニ付、不苦段申上候、御承知ニて御願被下候ニ付、右兩人之明高、金左衛門倅、長右衛門倅之被下置候ニ付、十郎右衛門、市郎右衛門同高同扶持ニ被召出候由

一、寛文四甲辰年四月、鮫ヶ橋谷町居屋敷三拾壹人一所ニ拝領 「(朱書)当辰三十八才」

青	木	代	助	矢	部	庄	右	衛	門	遠	藤	市	郎	兵	衛			
近	藤	弥	次	右	衛	門	新	城	与	兵	衛	秋	野	喜	兵	衛		
永	持	源	右	衛	門	中	根	市	郎	右	衛	門	平	井	八	兵	衛	
吉	村	武	兵	衛	永	井	八	郎	兵	衛	中	根	長	右	衛	門		
高	井	三	郎	右	衛	門	鈴	木	伝	兵	衛	西	田	四	郎	右	衛	門

松下	金左衛門	左右田	五兵衛	深沢	勘兵衛
近藤	彦左衛門	萩野	作左衛門	野村	善兵衛
太田	与左衛門	杉屋	七郎左衛門	新見	源左衛門
杉内	喜右衛門	三浦	茂兵衛	磯崎	久右衛門
押田	喜太郎	最上	甚右衛門	松下	十郎右衛門
大竹	平兵衛				

右青木代助屋敷上ニ一ヶ所大竹平兵衛屋敷と近藤弥次右衛門屋敷と之間ニ一ヶ所空地有之、惣屋鋪水溜場也、右惣屋鋪委細屋敷一部書ニ記

一、寛文八戊申年二月四日、四ツ谷北伊賀町、伊賀者椎名兵左衛門地借り御旗本久保五郎兵衛殿より出火、伊賀町四ツ辻南通り鮫ヶ橋類焼、此節 御広敷相勤候類焼之者え金三両ツ、被下置、十郎右衛門、市郎兵衛も拝領、此節町屋御改有之、委細屋敷一部書ニ記

一、同十三癸丑年二月十九日、金左衛門病死ニ付五十日忌中断(朱書)「当丑二十郎右衛門四十七才」

一、延宝六戊午年正月六日、金左衛門妻病死ニ付五十日忌中断「当午二十郎右衛門五十二才」

一、同年二月十日、四ツ谷伊賀町東福院近所、伊賀者椎名郷右衛門地借り御旗本有田忠右衛門殿より出火、鮫ヶ橋類焼御広敷伊賀者之内式拾壹人類焼、此節拝借金三両ツ、被仰付上納十ヶ年賦ニ被仰付、

十郎右衛門、市郎兵衛も拝借仕、委細上納一部書二記

一、天和二壬戌年十一月廿八日、川田窪竹町より出火、伊賀町通鮫ヶ橋類焼、十郎右衛門、市郎兵衛類焼、此節町屋御改有之、委細屋敷一部書二記

一、元禄元戊辰年十月十日、伊賀者近藤太右衛門取持にて小普請方手代西川五郎左衛門甥山下伊左衛門養子ニ致内談極、養子願相叶次第手前へ引取可申答にて、勿論持参金四拾両町屋敷添可申約諾にて極ル、尤願書ニは伊左衛門儀十郎右衛門甥之由ニ申立、願之通相叶、翌年己巳年十郎右衛門手前へ引取、委細伊太夫記之所ニ記「当巳^(朱書)当巳六十三才」

一、同二己巳年六月拝領屋敷四ツ谷名主勘兵衛支配被仰付候様ニ谷町一統願書出ス、委細屋敷一部書二記

一、同四辛未年、中風煩、奉願明屋敷組ニ入、同年伊左衛門へ家督無相違被下置候様奉願候処、同年十

一月廿二日願之通被仰付、委細伊太夫記之所ニ記「当未^(朱書)六十五才」

一、同十六癸未年九月十九日病死、行年七十七歳

戒名心応浄哲居士 四ツ谷福寿院へ葬ル

十郎右衛門一生無妻、遠藤市郎兵衛謀ニよつて下女を拘て妾とす、名を杉と云、伊太夫代迄存命、勝手賄いたし罷在、其已後病死、福寿院ニ葬、但、善左衛門親類書に祖母玉置新右衛門娘と有、夫ニては妻有様なれ共、伊太夫ヲ甥と書出し候為ニ、仮に新右衛門娘此杉姪婿、青山百人町ニ吉兵衛と申者有之、十郎右衛門妻と書出し給ふと見ゆ

菩提所元ハ青山長安寺也、宗門浄土宗ニて候処、十郎右衛門福寿院へ改宗、十郎右衛門禅学いた

し候敷、又ハ無学ニテ禪宗を崇候哉、其訳不知、自是代々禪宗也

十郎右衛門御広敷勤候節、番之頭部屋書役相勤、勿論伊賀之内ニテ加役故、羽織袴ニテ相勤ル
十郎右衛門拝領屋敷、本書之通寛文四辰四月、三拾老人一所ニ拝領、十郎右衛門南隣ハ遠藤市郎
兵衛拝領ス、其頃十郎右衛門は壯年、市郎兵衛ハ余程歳下故、市郎兵衛母十郎右衛門へ差引之儀
杯被頼候、十郎右衛門独身故、衣類等之世話ハ市郎兵衛母引請世話被致、尤屋敷境内証道を明ケ
置、朝暮共入魂ニテ候由、市郎兵衛子共段々出生、委細遠藤家譜ニ記、右子共之儀十郎右衛門愛
憐被致候、十郎右衛門実子無之ニ付、山下伊左衛門儀、養子ニ願引取、市郎兵衛娘名お長ト云其
頃「ママ 以下文なし」
十郎右衛門御本丸御広敷伊賀者相勤候節ハ、一番側ニテ番之頭左之通、年曆久事故次第同からず、
且姓名不相知も有之、旧記ニ有之分大概書一番組番之頭、貞享三寅十二月晦日島藤左衛門殿跡役
ニ山田太左衛門殿被仰付候

伊太夫記

但、誕生より十九歳迄ハ実方記ニ委記

一、元禄元戊辰年十月十日、十郎右衛門方へ養子ニ内談極ル、伊賀者近藤太右衛門始終取持、養子願ニ
は十郎右衛門実甥之分ニ申立相願候処、願之通被仰付、翌己巳年西川五郎左衛門方より十郎右衛門方
へ引越す「(朱書)但巳十九才」

養子内談ニテ持参金四拾両、町屋敷一ヶ所可遣ニ極り、辰十月十日持参金之内三拾両十郎右衛門方へ渡ス、但、五郎左衛門甥ニ候へ共幼少より養育故、実子同前ニ愛憐被致、此節之諸入用は不及云、万事五郎左衛門世話ニテ十郎右衛門方へ来ル、翌巳年十郎右衛門方へ引越之節、持参之品々別次記此節家来老人召連来召仕候

持参之品

- 一、具足 一領 一、鎗 一筋 一、町並屋敷 一ヶ所
- 一、鏡 二面 一、持参金四拾両

右之外諸道具勿論、腰物衣類等ニ至迄、五郎左衛門仕立候て差越候

一、右持参金四拾両ニ相定養子契約之節、右辰十月十日十郎右衛門自筆之手形老通

一、同四辛未年十一月廿二日、十郎右衛門病氣ニ付家督無相違被下置、明屋敷番入被仰付旨、御本丸焼

火之間、於御廊下御留守居、仙石因幡守殿御書付を以被申渡(朱書)「当未廿一才」

明屋敷番伊賀組頭、永井水之助、山岡太郎左衛門、宮地権兵衛

一、同五壬申年二月廿三日、御広敷番伊賀被仰付旨、御本丸焼火之間於御廊下御留守居彦坂老岐守殿被

申渡、誓詞は老岐守殿宅ニテ済、此節一所ニ誓詞、細倉平次、伊藤十蔵と三人也、貴志孫太夫殿同道、

伊太夫儀二番組へ入、三月四日より初番ニ出ル、稽古番は不致候、二番組番頭間宮孫太郎殿、平賀三

五郎殿也(朱書)「当申廿二才」

一、同七甲戌年二月八日、四ツ谷石切町向角屋根屋庄兵衛方より出火、鮫ヶ橋類焼、此火芝浦ニテ止ル、

御台様より類焼之者へ金百疋ツ、被下、市郎兵衛、伊左衛門共頂戴、同十二日請取

一、同年六月十九日、屋敷之内ニ町人差置申間敷旨至来、春御改可有之旨御書付出ル、委細屋敷一部書
二記

一、同年七月番之頭、間宮孫太郎殿、平賀三五郎殿迄願書を以町人差置度旨申達、委細屋敷一部書二記
一、同八乙亥年十二月七日、町役相勤候分は有来之通、此外武士屋敷ニ有之、町屋之分ハ差止メ可申旨、
当年は余日も無之候ハ、来春三月迄ニ町屋引払候様御書付出ル、委細屋敷一部書二記

一、同月廿五日、町屋絵図牧野半三郎殿へ致持参候、屋敷一部書ニも記

一、同九丙子年正月、谷町地主三拾三人地借り、人別書御留守居北条安房守殿迄上ル、委細屋敷一部書
二記

一、同月廿五日、御広敷向より願書出ス、先年より借来候て内証名主申付候、此度町奉行支配ニて四ツ
谷名主勘兵衛支配ニ成候様願申候、委細は屋敷一部書ニ記

一、同年二月晦日、町屋御赦免被仰出、三月二日御広敷方え御留守居岡部丹波守殿被申渡、委細屋敷一
部書ニ記

一、同年四月九日、屋敷売間樽屋市右衛門方へ遣、委細屋敷一部書ニ記

一、同月廿日、何町表口裏行何程誰組之訳認、町奉行川口撰津守殿御番所へ町人持参候様、御留守居大
久保玄蕃頭殿、御広敷御書付御持参、間宮孫太郎殿、平賀三五郎殿へ御渡被成候、委細屋敷一部書ニ
記

一、同十丁丑年二月四日、松井又左衛門妻水戸え参候、金町松戸関所手形願、松井又左衛門被頼候ニ付、
伊太夫願主ニ成、関所手形印形取、委細は伊太夫記置候万覚ニ云折本ニ有之

一、同年八月二日親類書番之頭、間宮孫太郎殿、有田十右衛門殿へ出ス、委細は伊太夫記置候、万覺書
卜云折本ニ有之

一、同十一月戊寅年三月六日、菊地小左衛門、松下伊太夫御広敷ノ戸番被申付、是ハ今田十左衛門、水本
権右衛門、表火之番ニ被仰付候ニ付、ノ戸番十左衛門跡小左衛門、権右衛門跡伊太夫

一、同年十月伊賀者地方由緒書御老中戸田山城守殿、阿部豊後守殿御僉議ニ付、明屋敷組頭より請帳ニ
認メ、御留守居松平主計頭殿迄上ル、地方無之伊賀者も同断、此節明屋敷組頭永井水之助、山岡太郎
左衛門、宮地権兵衛方由緒書出ス、控は伊太夫記置候万覺書卜云折本ニ有之、然共此所ニも写置之

覺

御広敷 有 田 十右衛門組伊賀者

土 屋 勘 介

一、高式拾俵式斗六升式合五勺

本国三州 松 下 伊 太 夫

式人半扶持

生国武州 寅三十一歳

一、私養曾祖父松下孫右衛門儀、三州苜谷之御城ニて御奉公相勤申候、御奉公之筋目は不奉存候、養祖
父松下金左衛門儀八十五年以前寅卯兩年之御陣御供仕御持弓久永源兵衛組ニて御奉公相勤、其後井戸
新右衛門組ニ罷成候節、五十八年以前辛巳年嚴有院様御誕生ニ付三州者之筋目御奉公之年数御僉議
被遊、兩御陣共御供仕候ニ付、右養祖父松下金左衛門儀御広敷御番被仰付相勤、其後栄松院殿元屋敷
定番ニ被仰付、無恙相勤候ニ付、為御加増分四十六年以前癸巳年私養父松下十郎右衛門被召出、伊賀
組之御入御広敷御番相勤、其後病氣ニ付御番御赦免明屋敷番へ入候、右養父十郎衛門跡式八年以前私

被下置、只今御広敷御番相勤申候、以上

元禄十一年

寅十月

松下伊太夫印

永井水之助殿

山岡太郎左衛門殿

宮地権兵衛殿

一、同十二己卯年閏九月十日、御譜代之者へ御金被下置之旨被仰出、但、式拾俵取より三拾俵取迄三両ツ、五拾俵より百俵取迄五両ツ、其上ハ准之、三拾俵取之内ニても御用部屋書役は四両ツ、同十一月十八日ニ拝領、番之頭有田十右衛門殿ニて請取、市郎兵衛伊太夫同組故、一所ニ請取

但、此節被下候御金後々由緒書ニ御譜代金拝領と認申候は此金之事也

一、同十五壬午年八月晦日、御留守居水野長門守殿被申渡候は、伊太夫儀願之通小普請人足方伊賀者ニ被仰付御役扶持式人扶持被下候旨被申渡候、同閏八月朔日明屋敷組頭永井水之助同道ニて小普請定小屋へ罷越引渡済、小普請方十人衆之内安田彦八、内山源五右衛門、松井又左衛門被請取候、同四日定小屋元々ニて誓詞済、小普請奉行曲淵伊左衛門殿判元御覽済、同六日定小屋へ見習ニ出ル、同七日より増上寺場所へ出ル(朱書)「当午三十二才」

小普請人足方伊賀此時分相勤候者、勝手向宜成候故、伊太夫も願松井又左衛門殿縁続ニて候間、小普請方ニて世話被致取持被申候、遠藤市郎兵衛御広敷方ニて世話いたし諸共ニ願、番之頭土屋勘助殿、中根兵右衛門殿迄、願書出シ御留守居衆へ被申置候処、御留守居衆被申候は、羽織袴ニて相勤

候者、羽織計之場所を願候段、如何と御申被成候二付、小普請方ハ野場所勤之事故袴着不申候、格ハ同格ニテ御座候、其上養父十郎右衛門中風相煩罷在候、不勝手者之儀ニ候へハ、当番之節ハ女共計ニテ、火事急事等之節養父取扱候者も無御座候、小普請方へ相勤候へハ小遣之者老人ツ、請取申候故、右之者を頼遣候ニも勝手ニ能候間、何卒御願被下候様ニ市郎兵衛を以、伊太夫番之頭衆へ相願候へは、御聞届有之、御留守居衆へ取成被申候由、市郎兵衛物語ニ候、明屋敷組頭永井水之助同道ニテ定小屋へ引渡済候事ハ御役替格式宜成候事ニ被仰付候へハ、番之頭同道被致事ニ候へ共、是ハ同格式之場所故、御留守居衆より明屋敷組頭へ被申付候哉、又は一度明屋敷入被仰付、直ニ小普請方へ被仰付候哉不知

十人衆之事ハ、元小普請方ハ京大坂在番之衆、御城内小普請有之、或は掃除等有之、人夫入用之節ハ在番衆之家来を其高二応し差出し御用立被申事也、其格ニ江戸表ニても病氣幼少ニテ無役之者高割ニテ金銀上納、是を以人足金ニ用ひ大御番衆より御破損奉行被仰付、小普請組頭と謂之、手代其外役人有之、人足方ハ五拾俵取程之者被仰付人足方上役と謂之、其下役ニ伊賀者被仰付、人足請負之町人申付御用相勤候、御作事方ハ表立候御普請被仰付、小普請之方ハ破損修復被仰付、此趣故大奥方御休息所小普請之方へ被仰付、常憲院様御代小普請之方発向、破損修復ニ不限、御普請をも被仰付、小普請組頭之事、元禄十四巳年より組頭と申号相止、小普請奉行と被仰付、依之諸大夫と被仰付、伊左衛門元禄十五年人足方伊賀被仰付候故、小普請奉行支配ニ被仰付人足方上役を十人衆と謂之

一、元禄十六未年十一月十八日

出火

鮫ヶ橋類焼、市郎兵衛、伊太夫も類焼、此節榮林寺谷之奥之方焼残ル、其所伊賀百姓地也、此所ニ致借宅拝領屋敷小屋掛出来ニ付引移ル

一、宝永二乙酉年親類書出ス

拝領屋敷四ッ谷鮫ヶ橋坪数百六十式坪五合住宅仕候
先規より町屋ニて売人も指置申候

養父 松下 十郎右衛門

実父 栗林 甚兵衛

高式拾俵式斗六升式合五勺

松下 伊太夫

式人半扶持

本国三州
生国武蔵

西三十八歳

外ニ御役料式人扶持

私養父十郎右衛門実は母方叔父、実子無御座候ニ付、私儀養子ニ奉願、十八年以前辰年養子ニ被仰付候、養父十郎右衛門儀御広敷御番相勤候処、病氣ニ付御訴訟仕、十五年以前未年右御番御赦免明屋敷御番ニ罷成、同年十一月家督私ニ被下置明屋敷御番相勤、十四年以前申年御広敷御番被仰付相勤罷在候処ニ、四年以前午八月小普請人足方伊賀者被仰付候

親類書

伊賀者四十五年以前丑年病死

一、	娘		右同断	老人
一、	弟	出家仕出羽国山形光禪寺ニ罷在候		宗海
一、	妹	浪人ニテ御当地ニ罷在候		松井左太夫妻
一、	甥	父松井左太夫方ニ罷在候		松井源四郎
一、	甥		右同断	松井熊之助
一、	甥		右同断	松井伊之助
	実母方			
一、	祖父	伊賀者四十五年以前丑年病死		松下金左衛門
一、	祖母			筋目不相知病死
一、	叔父	伊賀者三年以前九月十九日病死		松下十郎右衛門
一、	叔母			平井平右衛門母
	縁者			
一、	舅			遠藤市郎兵衛
一、	舅女	明屋敷御番伊賀		芹沢市右衛門娘
一、	小舅	父遠藤市郎兵衛方ニ罷在候		遠藤長次郎
一、	小舅女		右同断	式人
	右之外近親類縁者無御座候、以上			

宝永二乙酉年

松下伊太夫印書判

右之通認出ス、宛所無之

一、同七庚寅年二月、熊之助熊太郎事市郎兵衛方へ養子ニ遣可申内談濟、今月願書之通被仰付、委細熊太郎記之所ニ記

一、正徳四甲午年三月六日病死 行年四十四歳

戒名珠徳眼勝居士 四ツ谷福寿院葬

火葬而福寿院ニ納葬、骨之中二人之形之物有り、俗ニ骨仏と云、是を高野山ニ納、当年成徳院在江故頼之遣ス、翌々年享保元申年九月成徳院在江戸故午年骨仏頼遣候刻、永々月拝料金百疋奉納ニ付毎月命日飯供、且毎日朝夕勤行、香燈明、茶菓等備之旨証文書持参、勿論門守護札持参、右申年より隔年参来、其節々青銅百文ツ、奉納、但門守護札并土産物隔年ニ有之、伊太夫御広敷伊賀者相勤候迄ハ伊左衛門と云、元禄十五年八月晦日小普請人足方伊賀者被仰付、閏八月朔日小普請人足方定小屋へ罷越引渡濟、奉行曲渕伊左衛門殿と申候故、此節より伊太夫と改ル